

奈良町の建造物調査

建造物研究室

奈良町において2件の建造物調査を行い、いずれも興味深い知見を得ることができた。調査は奈良市教育委員会が主体となって行ない、当研究室がこれに協力した。

1. 悲田院（南城戸町）の調査 建物の改築に伴う記録調査である。悲田院は、阿弥陀寺末の尼寺で、天正のころ浄土宗に転宗、元和五年に焼失の後再建と伝える。調査当時は西からの参道に沿って北側に長屋・境内社・地藏堂が並び、参道の突き当たりに堂を構えていた。堂は方三間宝形造で西面し、内部は北東の方二間部分を内陣とし、L字形に外陣が巡るという特異な平面である。軸部に改造があるほか、当初は向拝もなく、また、本堂周囲の住居部分もすべて後に付加されたものである。木太い柱の他には時代判定の資料となる細部絵様がなかったが、取り壊し時に、屋根の左義長柱の頂部から明暦二年（1656）の墨書を持つ銅鉤が発見されて、建立年代が確定した。近世前期の異色の小規模仏堂であり、その消失が惜まれる。

これに加えて境内社も春日大社末社の移殿であることが判明した。一間社春日造板葺の小社であるが、前後の妻飾に板葺股が刻み出されており、これは末社手力雄神社の他に類例のない特色である。平面寸法もほぼ一致して、移殿であることを裏付けた。手力雄神社の移殿は初めての確認であり、建立年代は18世紀には遡るものと推定される。

2. 絹谷家（元林院町）の調査 元林院町東側に位置する三棟からなる町家で、町並調査時には、中央の主棟が文化ころの建築で、近代に町が遊廓として最も栄えたころ、両側に順次建築されたものと推定された。その後、前面その他の修理を行なったところ、棟札が発見されたとの報に接し、急拠調査を行った。棟札は、主棟の棟木に和釘で打ち付けてあり、打ち替えの痕跡もないため、その年号寛保二年（1842）は、建立年代を示すものと見られる。町並調査の際には棟札まで調査が及ばずに、その存否が不明であっただけに、この発見の意義は大きく、また本例から推して、今後棟札が発見されれば、他の町家の年代も現今の推定より幾分古くなる可能性が高いと予想される。かような史料の増加は町並の保存にも資する所が多く、今後の調査を期待したい。

（松本修自・島田敏男）